



わたくしにとつて大学ノートというとまずなによりも父伊藤整の死後、書齋で見つけた大学ノートである。小説家だったから、かれのいなくなつた書齋には、原稿用紙や手帳や日記帳を含めてかなりの量の書きものが遺されていた。書きかけの原稿、印刷所から戻つてきた赤の入つた原稿、反故の詰め込まれた紙袋、古郵便物、手帳類などが、机の上、あちらの棚、こちらの部屋、床の上などに残つていた。

大学ノートもそのとき見つけたものであったが、これは他の書きものと区別すべき性格の発見物だった。内容が観念的な文学上の仕事ではなく、現実の生活の記録だったからである。具体的に言つと、昭和十六年から二十年にわたる太平洋戦争（日記帳には大東亜戦争

ここでわたくしはまず父の書齋のことと、発見した当時の状況について話そうと思う。書齋について話すというのはわたくしと父の關係についても話すことになるからである。

わたくしの父は広い家のなかで五つの部屋を書齋として使つていた。小説家であるとともに評論家でもあり、また何よりも文学史家であつたために書籍、資料の量が増える一方だったのである。昭和二十八年に家が建てられた当時、仕事部屋は書齋一部屋、書庫一部屋だったが、そのうちに建物は増築され周辺の部屋がだんだん占領されていった。そしてどの部屋にも足の踏み場もないほど書籍類が積みあがつた。

作家の書齋は多く同じようかもしれないが、かれも書齋を自分だけの世界にしていた。入つてはいけなさと家族にむかつて口に出して宣言したとは思えないが、ともかくわたくしの家ではわたくしが生まれた時から父の仕事場である書齋は、母を含めて誰も足をふみ入れぬことになつていた。例外は小説家の書齋を撮るために出版社から派遣されてくるカメラマンぐらいのものであつた。かれらは大胆にも、平気で父の書齋に入つてゆくのであつた。土門拳、田沼武能、濱谷浩という

と記されている）の日記だった。開戦から終戦に至るまでの三年八か月の戦争の日々の記録がごろりと出てきたのであつた。さらに、読んで分かつたことであるが、たいへんに克明な日記だった。ちなみにかれは晩年も日記をつけていたが、それはこれにくらべると仕事の備忘録的なもので、同じ人物が書いたものとして大きな違いがあつた。日記帳は晩年は博文館の当用日記を用いている。

戦争の文人日記は、荷風、百閒、ロッパ、高見順、風太郎、青野季吉、夢声などが発表されているが、それらを頭において考えると、父の日記は仕事や戦争の経緯にとどまらず家族全体を見渡しているという点で夢声日記に似通うところがあるように思えた。また、諸家の日記も現物はそうだったかもしれないが、当時の新聞記事の切り抜きが大量に貼り込まれていたから、いわばわが家族を中心にした太平洋戦争物語と言つてもよいほどのものになつていた。家族への言及も多から息子であるわたくし自身にも關係があることも分かつてきた。そういう点で他の遺稿類とちがうものだったのである。

ひとびとが撮つた書齋の写真が残っている。しかしそういうことは時たまのことで、写真家の活動は父の作家生活をおびやかすものでもなかつた。

書齋が本人の占有空間だということは、同時に家族は彼の人格に干渉しないことになつていくということの意味していた。そして、人格に干渉しないということの正しいところは、家族は彼の作品を読まないということだった。過去現在を問わず、出版された彼の本を読まれていても、家族は誰もそんなことは知らないということだった。父も自分の文章が家族に気付かれることにはないと安心して呼吸していた。その流れに沿つたことをさらに言つと、かれの顔色を窺つたり、用もないのに話しかけたりもしないということだった。話しかけたり質問したりしてかれの中身を覗こうとするのは不躑躅なことになるのであつた。家にはそういう秩序があつた。そういうふうには父は家族にいたわられていたと言つと、家族が裸の王様に一方的にひれ伏して喜んでいたりするような解釈も成り立つが、かならずしもそうでなかつたのである。秩序に亀裂が入りそうになれば、それを正す力はちゃんと発動されたのである。実際父